

2024 年 4 月

## 2023 年度 北星学園附属高等学校に関する第三者評価

はじめに

本校は、評価（第三者評価）として、教育コンサルタント「Edu 企画」所長 川畑浩之氏に評価委員を委嘱している。北海道外、特に首都圏の教育内容、学校経営、運営の情報を、年に数回、校長が川畑氏とオンラインもしくは対面で面談を行いつつ、報告とアドバイスを委託してきた。

以下、氏のレポートを抜粋して報告とする。

### 1. 2023 年度の特徴

新型コロナが第 5 類になり感染対策は緩和された。以前の教育活動が再開できつつある。しかし、社会情勢も含めて、教育環境を取り巻く時代の変化は激しく、特に全国的に少子化と教員不足が進んでいる。教職員の意識が変化に取り残されないために研鑽を続けることが課題である。

そうした中で、2023 年度の入試において、284 名と定員（255 名）を超える新入生を確保できたことは、入試・広報活動や、教育内容、スクールバスも含め生徒のニーズに応えた募集戦略が順調に機能していると評価できる。何より 2023 年に卒業した生徒達のレポートや卒業セレモニーの報告を受けて、多くの卒業生が高校生活で得た充実感を抱いていたことが伺えた。これはコロナ禍でも、生徒達と支えてきた保護者の理解と支援の上に、通常の教育活動で、尽力してきた教員の努力の成果だとも受け取れるのではないか。このような循環が新たな新入生の獲得にも関係していると想像する。

引き続き、校長のリーダーシップのもと、在校生の満足度の維持、クラブ顧問も含め、全教職員で構築してきた教育活動の魅力を維持して欲しい。さらに組織としての役割、コンプライアンスの遵守、ガバナンス体制を高める研修を続ける必要がある。特に一部の教員に仕事や責任が集中していないかどうかの点検が必要である。この点は「働き方改革」にも通じる早急に取り組むべき課題である。

### 2. 「教育支援チーム」の取り組み

入学者へのアンケートに加えて、2022 年度に発足した「教育支援チーム」による生徒への定期アンケートを行っている。これは定期的に生徒に対して心身の状況を把握するために、校長、養護教諭と担当の英語科教諭で行っている。今までの手法では、こちらの意図が伝わらない生徒に、適切な指導を行えるように、外部の専門家から定期的にアドバイスを受けた。具体的にできる限りのサポートを模索しようとしているが、現場の教員や指導に活かされるには、さらなる連携の工夫が必要である。この取り組みにさらなる発展

を期待したい。

### 3. 学習指導、進路指導について

昨年と同様、男女共に英語や基礎学力の指導など、きめ細かな指導を期待していると言えよう。英語の少人数展開授業の実施などを通して、英語検定など外部試験の合格者が上昇している。また4年ぶりにカナダ語学研修（有志）が実施でき、参加できた生徒には刺激になったと考えられる。こうした取り組みによって、語学力のある生徒が増えてきたが、語学力のある生徒が、道内外の他大学に進学するケースが増えている。それにより系列校の北星学園大学の文学部英文学科への進学者は減っている。附属高校で力を入れているクラブ活動が、系列の北星学園大と継続されていないことも残念であるが、生徒が他大学へ進学しているという課題を見据えて、高大連携の取り組みを強めていくことは重要となってくるだろう。

2023年度の特色として、特進コースを中心に国公立大学や道外の難関私大への合格者を多数生み出すことができた。特進コースの進学指導のあり方が、今後も引き継がれるシステム作りが必要である。学校は進学実績のみをアピールしている訳ではないので、幅広い学力層が入学している。これも学校の魅力の一つであるが、一部のクラスでは、まじめに勉強をしたい生徒が、賑やかな運動部の生徒によって学習する機会を妨げられるような現象があるようだ。学習環境においては、最低限の秩序作りを構築しなければならないだろう。また、幅広い学力層に合わせた「個別最適化」を模索する時期にきているのかも知れない。

### 4. 期待される教育を創造し実践するための取り組み

以前から「探究」型の学習活動を推進しており、これは魅力のひとつである。特にICTを活用して、プレゼンの作成や、発表、意見交換の場など新しい学力観に基づく教育を推進している。これらをさらにブラッシュアップさせるために外部の研修会への積極的な参加を教員に促していくことが望ましい。昨年度から、学園が全教職員に統一したタブレット PC を配布した。Teams を使用した連絡の共有、そして会議資料のペーパーレス化が進んでいる。更なる DX 化の推進を期待したい。

（教育コンサルタント、有限会社「Edu 企画」川畑浩之）